
ニュースショー

柳 大知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニユースショー

【NZコード】

N4656F

【作者名】

柳 大知

【あらすじ】

ベテランニユースキャスター森岡一朗が誘拐された…

(前書き)

一応、「注意、全部架空の話です。」

午後7時30分（森岡自宅）

森岡一朗は自室のパソコンでニュース記事を一通り見てから、黒の高級車に乗り込んだ。

生放送の開始2時間前に局へ着くよう愛車に乗り込み、自ら運転してTV局へ向かう、これが10年間変わらない森岡の日曜の夜だった。

といふがこの日、自宅のガレージを出ようと森岡の前に若い男が立ちはだかった。

クラクションを鳴らしても男はその場から動く気配が無い。

森岡は運転席の窓を開け男に注意しようとした。だが次の瞬間、森岡は意識を失った…

午後8時30分（スタッフフルーム）

いつもなら打ち合わせを始める時間になつてもメインキャスターの森岡が到着していない。

プロデューサーが森岡の携帯に電話をかけたが電源が入つておらず繋がらなかつたそうで、森岡の自宅の電話も留守電だつたらしい。スタッフ達は慌てだし、プロデューサーに命じられたADが森岡の自宅に向かうことになった。

午後9時

森岡の自宅に向かつたADから連絡が入る、森岡の自宅に着くとちょうど夫人の帰宅と重なつたらしく、事情を話して家の中に入れただが、家の中に森岡の姿は無かつたといつ。

急遽、いつもは森岡の隣に座りアシスタントをしている吉永美香と原稿を読む男性アナの二人をメインにして今夜のニュース番組を放送する方向で進む。

男性だけでなく女性にも人気の吉永ならべランキャスター・森岡不在でも大丈夫だろうとプロデューサーが言つ。

午後10時

大人の色気を漂わせる黒のワンピースを着た吉永が番組の冒頭で森岡の急病を告げ生放送がはじまる。

午後10時20分

番組が問題なく進行していく中、プロデューサーの携帯に森岡の携帯から連絡が入る。

すると突然プロデューサーが大変だと叫んだ。どうやら森岡が監禁されているらしい。

プロデューサーが携帯電話にコードを繋ぐと会話がスタッフルームに流れた。

「本当なのか」とプロデューサー。

「森岡に喋らせる」

機械で声を変えた犯人が言つ。

電話の向こうから、犯人と森岡がやり取りをしている様子が聞こえた後、森岡が喋りだした、

「場所はわかりませんが、目隠しをされ手足を縛られています、犯人はおそらく拳銃だと思いますが、何かを私の体に突きつけていま

す。私は今夜自宅をでようとしたりで、何者かに薬を嗅がされ意識を奪われ、ここにいます」

冷静に淡々と語るその声は確かに森岡だ。

「何が目的だ」

とプロデューサーが犯人に訊く。

少しの沈黙の後に犯人が答える。

「すぐに、この電話を生放送に繋げろ、全国に流すんだ」

「そんなこと出来るわけが無いだろ」

プロデューサーは電話口に怒鳴りつける。

「なら森岡には死んでもうつぞ」

犯人も興奮しているようで息使いが荒い。

「どうしたら……」

スタッフの一人がプロデューサーに訊く。

「仕方ない、森岡の命が懸かっている、要求を呑もう……」

プロデューサーの一言で、スタッフ達は慌しく動き出した。

番組の進行を続けている吉永にもインカムで状況を知らせ、数分後にスタジオに電話を繋ぐことを伝える。

CMが終わり、吉永が喋りだす。

「突然ですが……、先程、番組のスタッフに一本の電話がありました。その内容は、いつもなら私の隣にいらっしゃる森岡一朗さんを誘拐監禁したというモノでした。私どものスタッフが森岡さんの声を確認し、犯人の言つことは事実だらうということになりました……」

「え~…」

吉永はそこで一瞬止まつたが、ディレクターのゴーサインを確認し続ける。

「え~、犯人は森岡さんの命と引き換えに、生番組に電話を繋ぐようスタッフに要求してきました。私達は森岡さんの無事を確保するため、今から犯人とコントакトをとりそれを放送致します…」

ブツといつ電子音と共に、スタジオに電話の音が流れ出す。

「よし、繋がったな」

犯人の機械声が全国に流れる。

「今から、森岡が喋る」

という犯人の声のあと、森岡が先程と同じように淡々と状況を説明していき、最後にこう付け加えた。

「いますぐ、電話を切りなさいー私はどうなつてもかまわない、こんな事で番組を壊しては…」

「余計なことを言つたな、殺すぞー！」

はつきりとではないがそう怒鳴つた犯人の地声が聞こえた。

「大丈夫です、続けますので、森岡さんに危害は加えないようにお願ひします…」

吉永がやや強張つた表情で犯人に告げる。

「それで、目的などはあるのでしょうか」

吉永の隣のベテラン男性アナウンサーが訊く。

少し間があつて犯人が言つ。

「吉永美香、服をすべて脱げ」

吉永は驚きの表情で田の前のスタッフを見る。

「どうします、CM行きますか?」

プロデューサーにスタッフが訊ねる。

「森岡の命がかかっている!」

プロデューサーは、このまま続行を支持する。

そして、インカムで吉永に命じる、

「森岡の命がかかっている、すまないが脱いでくれ……」

吉永は眉間にしわを寄せながらも服を脱いでいく。

その隣では流石のベテランアナウンサーも、どうしたらいいのかと動搖している。

「下着もだ!」

犯人の声がスタジオに響く。

吉永の裸体が全国のTVに映し出されると犯人は喋りだした。

「そのまま、吉永美香を映している!……いいか!日本国民、良く

聞け!」

『俳優の榎本勇一郎はヅラだ!』『ロックバンド、ファイブズのボ

ーカルはゲイだ!』

『女優の長岡麗子はイケメン俳優の瀬戸口啓と付き合つている』

犯人はどんどんと爆弾発言をしていく…

「どうかね？」と、プロテューサーは深夜の会議室に呼び出したティレクターに訊く。

私はこれまで局の為に家族も捨てて死んできたんだ。
だが先日、私は余命3ヶ月と宣告された！

何十年も製作に関わってきたが、このままでは大した功績も残さぬまま堅物番組のプロデューサーとして人生を終えるのだよ…
どうせならこんな事をやって最後に伝説でも作ってやるつかと思つたんだが…

「気持ちはわかりますけど…いくら何でもそんなに上手くいくわけありませんよ」

とティレクターはプロテューサーの最後の大企画を諦めさせた。

（終）

(後書き)

オチがひどいんで軽めに書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4656f/>

ニュースショー

2010年10月14日13時34分発行